猫蓑通信

第100号
平成27年
（2015年）
7月15日発行
（年4回発行）

連句のこれから

青木秀樹

去る六月六日（金）、二村文人さんの一周忌を前に、ご遺族の主催による「日向ひまわり独演会」が故人の世田谷区の実家を改装したギャラリー・フタムラで開催されました。大仰な法事ではなく故人の趣味の世界での行事とされたのは、いかにも文人さんらしく好ましく思われました。出演のひまわりさんは文人さんが将来性を高く評価し、昨年真打になった女流講談師で、歯切れのよい講談二席を聞きました。会場の広さにより、参加者は三十名程度でしたが、大学の名誉教授や富山県から来られた方など多彩な参加者で明るい雰囲気の漂う会になりました。独演会終了後、故人の遺影に線香を上げ、ご遺族と少し懇談しました。猫蓑会では橘文子さん、鈴木千恵子さんと私が参加、帰路表六句を巻き、文人さんのご霊前に供えました。

表六句「出の姿」

皐月富士すつきりとした出の姿　文子
袖に著けき向日葵の紋　秀樹
幾たびも兄のメールを見直して　千恵子
ウッドデッキに坐るギャラリー　文
初花を付けたる若木濠の端　樹
春の烏の帰る山々　千

二村文人さんの落語好きはよく知られていますが、寄席に行くと咄家が挨拶にくるほどだったとは大野鵠士さんの追悼文で知りました。

落語は江戸時代初期に滑稽談を大名などに聞かせた安楽庵策伝にはじまるというのが定説になっています。小咄に演者が創意工夫を加えてひとつの咄に仕立て、それを引き継がれたものが江戸中期に大衆化され、古典落語と呼ばれます。落語が生き残るためには演者の自由な工夫と時代とともに進化することが必要でした。

連句の祖となる連歌は歌会の余興として生まれ、即興性と意外性がもてはやされたといわれます。今、私たちが実作している連句は芭蕉が立ち上げた蕉風俳諧を元にしています。芭蕉が貞門俳諧、談林派俳諧を経て、創意工夫により独自の俳諧を確立したものです。ある日突然芭蕉が生まれたわけではありません。芭蕉自身、中国から伝えられた知識や唐詩の影響を色濃く残す初期の虚栗調、侘び・さびを強調した猿蓑調、そして軽みに意識をおいた晩年の炭俵調と三変しています。「付け」と「転じ」を基本とする俳諧の基本メカニズムを残しつつも、そこには文芸としてのコンセプトの変化が認められます。何が俳諧師としての芭蕉の創意と心境の変化をもたらしたのでしょうか。

連句人口の伸び悩みと高齢化が言われてかなり経ちます。日本社会の変化と軌を一にするものではありますが、連句復興、連句振興を願う私たちにとってそれでよいはずはありません。これからの連句発展のために、蕉風連句にさらに創意工夫を加えて現代にマッチする文芸に進化させるか、それとも全く新しいコンセプトによる新しい連句を創設するかの大きな岐路に、私たちは立っているように感じられます。

●目次●

第二十五回猫蓑同人会興行作品　2
歌仙全八巻のうち四巻
芭蕉忌は時雨曇【執筆を終えて】　松島アンズ　4
第二十九回亀戸天神社藤祭正式俳諧二十韻　4
藤祭正式俳諧配役　5
第百三十三回例会藤祭興行作品　二十韻八巻　6
亀戸天神社奉納直会興行作品　半歌仙　二十韻　9
藤祭り奉納正式俳諧と猫蓑会　東　明雅　8
歌仙「風の二月」　東　明雅　捌　10
しおりの場　東　明雅　10
第十九回えひめ俳句全国連句大会受賞作品
歌仙「散る花や」【附・受賞記】　鈴木了斎　捌　11
事務局だより　12

第二十五回猫蓑同人会作品

四巻を先行掲載します。残る四巻は次号掲載

あかあかと　の座

歌仙「彼岸の風」　鈴木千惠子　捌

悼　二村文人氏

扇もて彼岸の風を送られよ　千惠子
初蛍来る里の広縁　弘子
すらすらと描く墨絵の額ならん　ふみ
シナモンティーの香り楽しむ　曜子
船滑る鏡の海に浮かぶ月　酔山
髭の男の鹿を呼ぶ笛　山
ウ　若きらの秋狂言に興じたり　み
追つかけの果て晴れて妻の座　弘
東の間の恋は東京駅までに　み
シウマイ弁当手土産に買ふ　弘
飼主に似たるチワワのよく吠える　み
噴煙あげて怒る山々　山
冬障子あければ月のうつすらと　み
股引をはきけふも夜勤に　弘
介護士の助けを借りて入浴し　山
メトロはつなぐ四方八方　み
広重の百景に舞ふ花ふぶき　曜
朝寝の夢の続き見たくて　弘
ナオ　大きさを親子で競ふしやぼん玉　曜
なでしこジャパン応援をする　山
行列は会場ぐるり回るほど　仝
柱の陰に魔物潜みぬ　曜
芸人が候補にあがる文学賞　弘
マスクメロンをまるのまま食ふ　山
同窓会昔の男偉くなり　弘
自販機の前ふいに口づけ　曜
５０ミリ寄り集まれば濁流に　仝
つけつ放しのニュース番組　弘
白鷺城天守に仰ぐ月の眉　仝
糸を流して錆鮎を釣る　山
ナウ　利酒にやつとうなづく老杜氏　曜
おとな買ひする漫画全巻　弘
待合が社交場へと診療所　山
昭和歌謡に目がな聴き入る　弘
痴れ者の痴れ友を訪ふ花の径　千
遠く近くに耕の人　執筆

連衆　松原弘子　中村ふみ　前田曜子
吉田酔山

一つ家に　の座

歌仙「青蛙」　小池啓子　捌

青蛙都会の雨に濡るるかな　啓子
きらりと光る紫陽花の片　恭子
歌ひつつ下校の子等のにぎやかに　志世子
あとさきになり蹤いてくる犬　路子
銅像は南天の月眺めをり　転石
美術展には出さぬ傑作　恭
ウ　ひよんの笛ピィーと高音に吹き鳴らし　路
愛といふ字を指で背に書く　石
不便なの君しか見えぬ近視眼　志
机も椅子も丸い木製　恭
マイナンバー覚えられない十二桁　路
ソロバン講師ひびく読みあげ　志
冬安居祖父待つてゐる月の門　恭
駕籠もひえびえ杉田玄白　石
肉たべろ野菜食べろと書く雑誌　恭
スポーツジムへ駆け足でゆく　志
撫でやりぬ廃校守る花大樹　路
春の日影に語り合ふ友　志
ナオ　潮干狩貝の目方を競ふ浜　恭
ドローン落下の報せつぎつぎ　路
公開の犯人像に似た輩　石
はつきりしない相場動向　路
独逸車も伊太車もすべて買ひ換へて　恭
夏狂言を決める検番　石
香水のほのかに匂ふ昼寝の娘　志
意地も未練もしまふクローク　恭
棋聖戦あの一石がなかりせば　石
歩を大切に生きた人生　路
山の端を染めて昇りぬ望の月　志
ＢＧＭは蟋蟀の声　路
ナウ　零余子飯まぜてそろりとつまみ食ひ　恭
灘の生一本どくどくと注ぐ　石
文学賞候補になるといふ電話　恭
親戚筋の急に増えたり　石
産土の花ひつそりと誇らしく　啓
竹刀を肩に遅日帰り来　志

連衆　式田恭子　秋山志世子　倉本路子
林　転石

平成二十七年六月二十一日
新宿ワシントンホテル　新館

石山の　の座

歌仙「はじめての言葉」　鈴木美奈子　捌

はじめての言葉に出会ふ半夏かな　美奈子
　庭の小池に蜻蛉生るる　有子
山河にも海にも力満ち満ちて　了斎
　四駆アクセルぐいと踏み込む　未悠
月齢を確かめんとて日刊紙　昭
　皿の枝豆茎つきのまま　有
ウ　盆用意似た顔がみな集ひつつ　斎
　都内に墓地を探すひねもす　昭
もう一度逢ひたい人が夢の中　有
　物理教師と聞けばときめく　悠
大方のノーベル賞は金がらみ　斎
　サッカーＦＩＦＡのばれるどろどろ　有
機窓より間近かに覗く凍の月　悠
　同じ話題で同じ常連　斎
「知るカフェ」のドリンク無料学生街　昭
　サルトルつて誰どこの俳優　有
花大樹脳の模型に見えてくる　斎
　太極拳の動きのどらか　悠
ナオ　しやぼん玉ぽんとはじける十秒後　昭
　江戸風の屋根並ぶ川越　斎
あの頃は買つてもらへぬ飴細工　有
　逢魔が刻にひとさらひ来る　斎
受付嬢機械仕掛けでするお辞儀　悠
生身の女どうも愛せぬ　斎
陽に焼けた水着の下が気がかりに　悠
　紳士も化けるクルーザーでは　有
ふかふかのベッドに慣れた元闘士　斎
　弓もないのに矢だけ三本　悠
月照らす萩往還を走り抜け　有
　並ぶ帰燕と泊る安宿　昭
ナウ　水干で時代祭にデビューの子　悠
　ケーナの調べ龍笛に似る　昭
音もせぬ電波時計の狂ひなく　悠
　野点の席に舞ひこみし蝶　昭
ほろ酔ひの老懶の背に花吹雪　奈
　明日は弥生の尽くる黄昏　昭

連衆　佐々木有子　鈴木了斎　棚町未悠
　松原　昭

荒海や　の座

歌仙「国芳の猫」　石川　葵　捌

国芳の猫あぐらかくついりかな　葵
　守宮ぽとりと落ちてびつくり　久美子
登下校リーダーの旗掲げゐて　敦子
　バスドライバー挙手の挨拶　冬乃
開け放ち今宵の月を客とせん　霞
　尾花撫子生ふる前栽　久
ウ　秋袷うしろ姿の忘られず　乃
　もう抱いてゐるきつかけはいつ　久
どぶ川に揃ひのスリッパ捨てちやつた　乃
チャイナコリアン嫌日の策　久
あちこちと噴火続きの我が地球　敦
　休符のあとに響く和太鼓　葵
竜の玉ますます碧く潜みたり　久
　月の東司に敷松葉置き　乃
大屋根の鳩をこちらへ招きゐて　霞
　贔屓選手に一喜一憂　敦
樹木医は今年もみごと花咲かせ　仝
　光こぼるるうららかな午後　霞
ナオ　弥生尽稿を重ねること未だ　久
　シガー銘柄決めて注文　乃
黒服の目付き鋭く見え隠れ　久
　薬のつもり麻薬持ち込む　仝
コンビニの味に慣れたと老いた父　霞
　氷金時ミルクたっぷり　敦
薄雪草求めて岩嶺行き泥み　乃
　胸板厚き僕の出番だ　敦
ラブ・アフェア気怠きふたり籠る宿　霞
　三重に巻く帯重くはかなき　乃
静かにも友の訃報を写す月　久
　霧晴るる湖舫ひ舟揺れ　葵
ナウ　秋深しハヤブサ２号打ち上げて　乃
　体験学習お菓子工場　敦
比べみる柱の傷は兄を越え　霞
　復興募金小銭貯めゐる　敦
花の酒心の澱を洗ふらん　葵
　段々畑土匂ふ頃　霞

連衆　副島久美子　武井敦子　百武冬乃
　高塚　霞

芭蕉忌は時雨曇
正式俳諧執筆の役を終えて
松島アンズ

二〇一四年の芭蕉忌は時雨曇の芭蕉記念館、二〇一五年の藤祭は五月晴後春時雨の亀戸天神社にて、配役の皆様、会の皆様にお支えいただきましたことを第一番に御礼申し上げます。ことに藤祭の朝は、藤波を背景に東郁子様より「応援していますよ」と声をかけていただき、固くなっていた心がふわりと軽くなり、ありがたく存じました。

身の程わきまえず執筆の役をお受けした時、最初に浮かんだのは男もすなる執筆というものを女もしてみんとてのフレーズでしたが、これはこれまでに多くの先輩諸姉のお示し下さったお手本に倣ってすることなので適切ではありま

一年間のお役目を果たし、菅公像と記念撮影

第二十九回
亀戸天神社藤祭正式俳諧

俳諧之連歌　二十韻

広前に吟声清（すが）し藤祭　文子
神慮あまねくわたる鶯　蕉肝
春の駒岬の風を追ふならん　孝子
真青なる石ポケットに入れ　了斎
ウ　何時しかに登山仲間に加はれり　郁子
月に浮かんだ羅の女　恭子
カルヴァドス昔の恋のほろ苦く　暁巳
文学賞にノミネートされ　忠史
鰐皮の鞄どうやら質流れ　あや
水は低きに人は易きに　譲介
ナオ　真似てみる師の筆跡の日記始　千惠子
寒稽古には素振り百回　転石
蕎麦打ちの道具揃へて婿入りし　富子
黒髪ほどく新涼の閨　明子
湖渡り砂漠を渡り望の月　ひろみ
古き戦場訪うてつゆけし　酔山
ナウ　軽やかにトルコ行進曲弾けば　有子
ふとした仕草祖母にそつくり　弘子
平成は四半世紀の花万朶　秀樹
蝶の遊べるまどやかな空　執筆

平成二十七年四月二十二日　首尾
亀戸天神社神楽殿に於いて興行

せん。しかし、振り返ってみると、執筆の役は体力気力ともに伝統的には男の領分であったことを肯うことが多かったように思います。硯箱を載せて捧げ持つ文台は思いの外に重く、袴を付けての所作、二十韻一巻の吟声をするためには、いわゆるハンサムウーマンになりたい。果たしてそれは可能かどうかが難しく思われました。基本となる立ち居そのものが、さしあたっての問題でしたが、試しに朝のテレビ体操を日課にしてみると、そこそこの効果があって少しだけ明るい見通しとなりました。

執筆の作法一通りは、前任の武井雅子様の特訓のおかげで頭に入りました。柏の光ヶ丘近隣センターの和室を半日借り切って、配役全部の

神楽殿を心地よい晩春の風が抜ける

流れをおさらいする稽古に二度も付きあって下さったのです。ここは東明雅先生の柏連句会の会場であり、十五年前の入門の頃、今思えば若気のいたりの質問ばかりさせていただいた場所なのです。晩年の先生のご謦咳に接し得たことは本当に幸せな思い出です。

五里霧中の分野ともいえる吟声については、謡の名誉師範と思いがけないご縁ができました。謡と吟声は別物かもしれませんが、一からご指導いただいてたいへん勉強になりました。謡は「まず十年。ものになるのに三十年」とのことで、少し遅い出会いではありましたが、能楽と連歌連句との関係も興味深く、これからも続けられればと思います。

服装は、大学時代に趣味としていた薙刀の稽古袴とは勝手の違う優美な女袴で、これは歌膝という片膝座りのためでもあります。右袖の文台袖も珍しく、状況によって着付けの変る和服の自由自在さをあらためて感じたことでした。

文台は、藤祭には貝母亭清子宗匠よりの「風光る」（東明雅先生御染筆）を使いました。

執筆に求められるこうした約束事の意味するものは、正式俳諧の時間空間の中心に構えて、乱れず、詩神の声を聴きとる事ではないでしょうか。私は静かに引き締まる空気の中、芭蕉忌と藤祭と二度の得がたい体験をさせていただきました。

終わって猫蓑会会長、生生庵秀樹宗匠から「合格！」の力強い一言を頂き、一年間の執筆修行の巻、満尾となりました。

亀戸天神社藤祭正式俳諧配役

宗匠	青木　秀樹
脇宗匠	近藤　蕉肝
副宗匠	橘　文子
執筆	松島アンズ
知司	吉田　酔山
副知司	名古屋富子
座配	松原　弘子
花司	野口　明子
配硯	佐々木有子
仝	江津ひろみ
解説	林　転石

無事正式俳諧を終え、配役一同、ご神職を交えて菅公図像を背に記念撮影

亀戸天神社藤祭俳諧興行　1～6

太鼓橋の座

二十韻「越天楽」　坂本孝子　捌

藤の香や風にのり来る越天楽　孝子
　池に顔出す惜春の亀　忠史
週末は巣箱作りに励みゐて　健
　隣同士の煙草一服　通斉
ウ　十六夜の受賞を祝ふ宴なり　央子
　空まで届けゴーヤカーテン　史
島育ちこぼす皓歯の爽やかに　斉
　忘れ得ぬ人それは先生　史
茅葺の民家にかかる古時計　健
　般若心経喉が自慢で　斉
ナオ　鯛焼屋もとはヤンキーもてあまし　央
　寒月連れてさすらひの旅　仝
恋しさは姉さんよりも妹に　史
　骨もとろけるアラビアの夢　斉
快走艇億万長者の旗を立て　史
　株価高騰ぐいと冷や酒　健
ナウ　人の世の友には医師と弁護士を　孝
　デジタルカメラ押すだけでよし　健
花前線関八州を駆け抜けて　史
　剪毛終へし丘の羊等　央

連衆　根津忠史　由井　健　菅原通斉
　遠藤央子

神楽殿の座

二十韻「藤咲いて」　長坂節子　捌

藤咲いて水面に揺れる丹橋かな　節子
　集ひつつ鳴く子亀親亀　淳子
春袷衣桁に広げ干すならん　俊子
　ポップコーンはカラメルの味　鄭和
ウ　月覗く芝居の小屋に隙間風　酔山
　蒲団まさぐる指のか細き　和
云ふことなしまめで達者でイクメンで　淳
　始発電車に急ぐ釣人　山
薩摩には温泉もあり砂風呂も　仝
　笛吹ケトルピーピーと呼ぶ　淳
ナオ　青道心汗と涙でぐつちやぐちや　和
　常磐木落葉掃くにひまなし　淳
六十路越え一弦琴の家元に　俊
　新走り酌む車座の月　淳
雨戸あけ虫の声色招き入れ　山
　牡鹿の如く君に口づけ　仝
ナウ　トスカーナ山裾にあるレストラン　和
　家紋をつけて湯呑み注文　俊
満身に花吹雪受け夢心地　和
　都踊に配る手ぬぐひ　俊

連衆　上月淳子　三木俊子　高山鄭和
　吉田酔山

亀石の座

二十韻「藤浪や」　武井雅子　捌

藤浪や丹の橋渡る人の波　雅子
　春深き宮甲羅干す亀　郁子
大太鼓響きのどかに打ち出して　了斎
　体育座り目をこらす子ら　ひろみ
ウ　遠泳を見下ろしてゐる昼の月　有子
　珊瑚の繁る白南風の海　斎
黒髪の髷をほどくは誰のため　仝
　試す睦言七ヶ国語で　有
日本の清酒がなぜかよく売れる　雅
　買物券は地域限定　み
ナオ　山肌にS字を描くスキーヤー　郁
　昭和は去つて今や校長　み
思ひ出の歌の旋律美しく　有
　マリリンを恋ふ漸寒の頃　郁
月見ると魔女になる娘を好きになり　斎
　道の節高何にでも付く　有
ナウ　スマートフォン慣れてすつかり頼りきる　郁
　番屋の跡を自転車でゆき　斎
年輪は千を超えたる花大樹　み
　囀りの中眠る柴犬　執筆

連衆　東　郁子　鈴木了斎　江津ひろみ
　佐々木有子

太助灯籠の座

二十韻「亀鳴けば」　林　転石　捌

亀鳴けば天神の御意うるはしく　転石
血筋正しき宮の猫の子　蕉肝
色のよき春の苺を愛でもして　良子
中学生の茶道入門　志世子
ウ　ロケットは月をよぎつて大空へ　一枝
ガウチョパンツのぞめき戯れ　良
酸漿を吹く浮世絵のやうな唇　肝
遠きにありて思ふ島原　良
憧れのブッセと夢の中で逢ひ　志
ギルトトップの並ぶ本棚　枝
ナオ　冬籠り海を見つつと人づてに　肝
取り膳で酌む二合半の酒　良
さしあたり若き卵子を預けおく　仝
町の雀はコピペ疑ひ　枝
飛魚がいつせいに飛び月を追ふ　肝
今日も出たきり放蕩の父　枝
ナウ　供養せん野辺に転がるされかうべ　良
気分まかせの畑仕事を　志
序の舞の翁媼に花吹雪　良
影もおぼろな古都の街並　志

連衆　近藤蕉肝　本屋良子　秋山志世子
西田一枝

累卵塔の座

二十韻「藤房の」　高塚　霞　捌

藤房のゆれてゆかしや天神社　霞
笙の調も春更くる頃　佳之子
のどかに長き列車を乗り継ぎて　久美
リュック背負ひて飛び出して行く　正夫
ウ　隠棲の恩師の愛づる夏の月　秀樹
幼き妻の沸す菖蒲湯　美
悪党と言ひたいほどの男振り　之
大向うより成田屋の声　夫
三十年銀座の街に夢を追ひ　仝
生命保険済ます解約　樹
ナオ　食卓に用意されたる寒卵　夫
凍てつく道をジョギングの人　霞
薄情に見えても彼の深情け　樹
名前朱文字の墓を造れり　仝
月の舟雲かき分けて漕ぎ出づる　美
フルフェイスにて通ふ夜学子　之
ナウ　べいゴマもデイサービスの楽しみか　仝
宅配便で届く特産　夫
薦被り割ればはじまる花の宴　之
てふてふひらり吾子に寄り来る　美

連衆　染谷佳之子　齋藤久美　國司正夫
青木秀樹

神牛の座

二十韻「神牛の背」　永田吉文　捌

神牛の背光りたり藤祭　吉文
蝌蚪の群れ寄る琴柱灯籠　徹心
春袷きつちりと着て楽し気に　文子
ジグソーパズルピース合はせる　千恵子
ウ　手際よく糸瓜を漬ける主夫となり　富子
ひんやりとしたおゐど愛しき　文
寝待月眠らぬ街を照らしつつ　心
千百万円宇宙旅行費　富
角成らずコンピューターは投了す　心
飾り兜を脱がぬ幼児　文
ナオ　つい口がお迎へに行く左利き　惠
陽明門でみんな上向く　富
龍の持つ宝珠も月も凍るらん　惠
蜜柑の実る出湯に逗留　文
マドンナは聖にして俗超セクシー　惠
殿方の手は嘘言はぬもの　心
ナウ　新発明夢つむぎゐる町工場　吉
インドの九九は十の桁まで　惠
花爛漫マラソン完走老い忘れ　文
陶の土捏ね過ごす永き日　富

連衆　佐藤徹心　橘　文子　鈴木千恵子
名古屋富子

平成二十七年四月二十二日
於　亀戸天神社

亀戸天神社藤祭俳諧興行　7～8

筆塚の座

二十韻「藤の烟るや」　武井敦子　捌

咲き揃ふ藤の烟るや天神社　敦子
　スカイツリーを仰ぐ惜春　久美子
　鱵（さより）などにぎりて貰ふ若衆に　常義
　下駄の鼻緒は裂いた手拭　アンズ
ウ　納涼床せせらぎ聞けば昇る月　昭
　いつコクろうか二人もぢもぢ　ア
　ＩＬＯＶＥＹＯＵ邦訳出来ぬ時代あり　義
　吾輩は猫みやあみやあと鳴く　久
　日曜日たまにはどこか連れてつて　義
　ハワイ航路の際涯の星　ア
ナオ　雪道の轍をたどり国境　昭
　頬被する怪しげな影　久
　拉致問題ごまかしだらけまたもまた　仝
　一本松できつと逢はうね　ア
　月今宵君の手を取るうれしさよ　義
　大成功の村の地芝居　仝
ナウ　記者冥利利酒会に招かれて　昭
　アイドルおたくネットサーフィン　ア
　花時雨旅の衣をしつとりと　久
　峠越えればかかる初虹　昭

連衆　副島久美子　生田目常義　松島アンズ　松原昭

平成二十七年四月二十二日　於　亀戸天神社

琴柱灯籠の座

二十韻「風うまれ」　野口明子　捌

咲きそむる藤房に風うまれけり　明子
　巣立鳥鳴く入母屋の軒　弘子
　のどかに擬餌針作りきりもなし　路子
　清き川面をすべる水切り　曜子
ウ　焼酎の好みも合ひて月の友　文伸
　すててこ姿あなた最高　弘
　パパラッチヌード写真で大儲け　仝
　ダンクシュートは和製語と知る　伸
　赤門をくぐりて定期健診へ　曜
　気持ち良さげに伸びをする猫　伸
ナオ　雪女郎潜む鋭き峰々に　路
　自家用機にて主役登場　弘
　終戦後みなが嫌つた脱脂乳　路
　蜩の中深く額づく　明
　月に打つ太鼓のやうな熱き恋　弘
　同棲五年部屋の冷やか　明
ナウ　いつの日か童話作家になるが夢　路
　自由自在なロボットの指　伸
　山の奥落人村の花遅し　路
　昔ながらの母の草餅　伸

連衆　松原弘子　倉本路子　前田曜子　若林文伸

藤祭り奉納正式俳諧と猫蓑会

東　明雅

平成十四年（二〇〇二）十月二十五日　亀戸天神社刊
『亀戸天神』御神忌一一〇〇年記念号より転載

昭和六十二年四月二十五日、われわれ猫蓑会は、亀戸天神藤祭りに初めて正式俳諧を興行し奉納した。これが毎年の慣例となって、今年まで十六年にわたって、計十六回、正式俳諧を興行し、天神様に奉納致したことになる。

もともと、正式俳諧とは俳諧（連句）の世界で、芭蕉その他流派の始祖の忌日、あるいは宗匠立机式など、事ある時に取り行なわれる儀式的な俳諧興行を言う。天神様は学問の神様であり、ことに和歌（連歌）の神として尊ばれ、俳諧（連歌）一巻を捧げる事は最高の御供物になるからと、故木村禰宜のご懇篤なおすすめに従ったわけであった。

ここで、その式次第に従って、簡単に説明すると、㈠席入り。まず知司という役が俳諧興行開始を告げると、座配という役が先導して、宗匠・脇宗匠・貴賓（招待の客）を着席させる。連衆一同はその前既に着席。

㈡配硯。主だった人に硯を配る。

㈢献花。宗匠の「献花」の声で、花司が花を活け、神前に供える。

㈣執筆呼び出し。宗匠「執筆、執筆」と呼び、執筆は文台をもって立ち、神前に着座。

㈤文台捌。執筆文台上の懐紙・筆・硯などを既定の場に納め、歌膝（左膝を立てた坐り方）で待つ。

㈥俳諧興行。興行に先立って知司が既に下俳諧（予め作っておいた作品）が出来ていることを告げ、連衆はそのあとを付け進める。まず、付句を小短冊に書き「付け」と言って文台の前に進み出、執筆に示

亀戸天神奉納直会興行より二巻

平成二十七年五月二十日　首尾
於　錦糸町テルミナ「Kawara」

藤祭興行の各作品は、古式に則って懐紙に墨書し、水引で綴じたものを約一ヶ月後に同社に奉納します。懐紙奉納の神事と直会の後、正式俳諧の宗匠、執筆と、奉納各巻の捌、猫蓑会役員一同で数卓に分かれて直会作品を巻くのが恒例です。

二十韻「橋一つ」　橘　文子　捌

橋一つ越えて薄暑の街に入る　文子
　団扇代りの本をひらひら　恭子
エレクトーン指の動きの滑らかに　雅子
　メニューの彩の誘ふテーブル　霞
ウ
地球儀の軸の傾ぎに月の影　節子
　肩を寄せ合ふやや寒の路　明子
俵編今度の夫は不器用で　恭
　男らしさは優しさのこと　霞
労働と祈りに暮るる修道僧　雅
　乗換駅をネット検索　節
ナオ
岩山を羚羊の群転々と　明
　天険の城夢想する王　仝
この愛の届くまで待つ窓の外　恭
　パートナーシップ貰ふ証明　節
白星の月夏場所は超満員　雅
　酒の席ではほどほどに酔ひ　恭
ナウ
七十年経つて憲法変へるのか　雅
　鯉ゆつくりと泳ぐ永き日　霞
花衣袖の模様を競ひ合ふ　恭
　幼児の頬撫づる軟東風　霞

連衆　式田恭子　武井雅子　高塚　霞
　長坂節子　野口明子

半歌仙「水干の」　松島アンズ　捌

水干の袖吹き返す南風かな　アンズ
　楠の若葉の薫り立つ頃　孝子
デバイダー海図の上の距離を見て　転石
　空のグラスに指を遊ばす　了斎
ゆらゆらと歪んで昇る赤い月　仝
　出入り禁止の松茸の山　石
ウ
地芝居の美声聞かせる男衆　孝
　小麦色なる肌艶つぽく　仝
恋文を乗せたドローン不時着す　斎
　吹雪溜りのやうな追憶　仝
月へ哭く羅馬の丘の狼は　石
　乳が流れて温泉になり　斎
勝ち越して手刀を切る前頭　孝
　わらしべ長者叩く電卓　石
あるときはペンキ塗りたて道祖神　孝
　ポケットの中蛙飛び込む　ア
花咲けば香具師の稼業の雲を追ひ　孝
　春匂ひたつ球場の土　石

連衆　坂本孝子　林　転石　鈴木了斎

す。執筆は一応調べて宗匠に見せ、よしとあれば「句あり」と言って懐紙にしたため、小短冊を返す。句主は座に戻り、執筆は重ねてその句を読む。

㈦玉串奉奠。句の花の前句が付いたら、執筆は「花前」と呼ぶ。副知司が進み出て宗匠に花の句を乞う。花の句の主が決まったら執筆は花の前句を読む。神官が玉串を持って出、宗匠に渡し、これを宗匠は神前に供え拝礼。花の句を付ける。

㈧花の句披露。執筆は宗匠の花の句を脇宗匠に見せ、「句有り」と言って吟声して懐紙に書く。挙句は執筆が付け、吟声して懐紙に書く。

㈨吟声・文台返し・懐紙奉納。執筆は当日の一巻を吟声して披露し、作法通り文台を返し、作品を神前に奉納。配硯が硯を集め、興行は終了する。

当日は正式俳諧興行の他に、第二部として、連衆が何組かに分かれて、作った連句（俳諧）を懐紙に書いて、後日、天神様に奉納する事になっている。第一回は六巻作り奉献したが、これも年次を追って増え、平成十四年の今年は、十四巻の多きに達した。尤も今年は天神様の御神忌壹千百年大祭という特別の会であっただけに、私どもも心して疎漏のないように努め、折角の盛典をもり上げるように準備怠りなく練習に励んだ甲斐があって、宗匠・執筆以下諸役の挙措発声も見事に、奉納した作品も年来のものとは異なる出色のものとなった。

おそらく天神様もよろこんでご嘉納下さったと思うし、我々も満足しているが、この奉納俳諧をおすすめ下さり、また永年にわたり、保護育成して下さった木村庸夫前禰宜が、千百年祭を前にして逝去され、折角の盛典をお目にかけ得なかったことが心残りである。

奉る連歌百巻藤祭り　明雅

『季刊連句』創刊号
昭和五十八年（一九八三）六月一日刊より転載

歌仙「風の二月」

東 明雅　捌

よく晴れて風の氷の二月かな　照敏
　林深きに咲きし金縷梅　時彦
ふらここに子等の群がり遊ぶらん　正江
　畳の縁に拾ふ糸屑　孝子
長話ひとりできかす十三夜　徒司
　螻蛄の鳴く道ともに行きつつ　明雅
ウ　冷まじく砂漠の果に砂漠あり　彦
　眉にかなしみ頬にほほゑみ　敏
きぬぎぬのひとを抱けば軽きこと　孝
　この二三日日記空白　司
寒夕焼高層ビルのあらはなり　江
　月の枯野に遊ぶ鍵つ子　司
クレーの絵「彩（いろ）は私の音譜です」　江
　鴉よ集へ死神が来る　彦
日雇ひの暮るれば呷るコップ酒　孝
　丸き座蒲団伊予の絣で　江
島山は花の上漕ぐ波の音　敏
　僧の下げ来し春の筍　孝
ナオ　捨蚕揺らし疾風のつのりけり　敏
　胃痛しばしば偏頭痛さへ　江
子のために家も屋敷も手ばなして　孝
　噂の好きな角の煙草屋　仝
喪の服を脱ぎてダンスに明けくるる　江
　人妻となり昼顔となり　敏
キーチェーンはづしてバスに湯を入るる　彦
　ひた走りくる産地直送　孝
　影もちて黒猫よぎる切通し　江
　　梢かくれに月代の雲　敏
　外厠まるめたる背のやや寒く　司
　　蕎麦こねてをり婆を死なせて　敏
ナウ　秋の川橋をくぐりて行くばかり　仝
　　空に漂ふ衛星の灰　司
　ひもすがら獏となりたる木曜日　江
　　額を拭ふ熱きおしぼり　仝
　花の雨明治大正幻に　雅
　　尾をつけしまま歩き出す蝌蚪　司

連衆　平井照敏　草間時彦　秋元正江
　　坂本孝子　杉内徒司
昭和五十八年二月二十日　首尾
於　俳句文学館

しおりの場

東 明雅

『季刊連句』第十七号
昭和六十二年（一九八七）六月一日刊より転載

「季刊連句」も十七号を迎えた。掲載した作品の数は正確に数えたことはないが、夥しいものに違いない。その中で忘れられぬ作品が幾つかある。その一つが創刊号の「風の二月」である。この作品にはコメントがついているから、それを読めば尚よく理解できるだろう。発句・脇と流石に当代一流の人のやりとりには目をみはるものがあるが（季刊連句創刊号一〇頁～一一頁参照）、

ナオ
10　梢かくれに月代の雲　照敏
11　外厠まるめたる背のやや寒く　徒司
12　　蕎麦こねてをり婆を死なせて　照敏
ナウ
1　秋の川橋をくぐりて行くばかり　仝

と、このあたりをコメントに『「外厠」から「秋の川橋をくぐりて行くばかり」の三句をこの一巻の山とみたい。述懐を思わせるこの句に、ナウ迄、何か胸につかえていたものが爽やかに吹きぬける』と言っているのは、この句だけでなく、大打越・打越・前句と変化しながら、一種のあわれ、しおりがあるからだろう。

そういえば、第十五号所載の芭蕉忌二十韻六巻のうち、米谷貞子さん捌きの一巻も表四句がしっかりして最後まで付味、転じが利いたすばらしい作品だが、この作品にも、

ナオ
1　銭亀を捕へし子より買ひ受けて　雅代
2　　長江長城中国の旅　明雅
3　厠口あけつぱなしに風が抜け　雅代
4　　はや呆けて来し舅姑　みづゑ

の一連がある。御存じの通り、中国風の厠は明けっぱなしで、旅行する日本人は困ることが多

いが、それをすぐ舅姑の呆けと取って来たところは老練であり、現代的なあわれとしおりが感ぜられるのではないか。しかも、前句「あけっぱなしに風が抜け」というのも、何か縹渺とした虚無が感じられる。

このすぐれた二連にそれぞれ外厠が出ているのは不思議だが、凡兆が芭蕉に「屎糞のこと申すべきか」と質問したのに「嫌ふべからず、されど、百韻といふとも二句に過ぐべからず。一句なくてもよからん」と答えている。

現代は、あまりに便利に、贅沢になりすぎたため、外厠は、僅かに残された「しおり」の場の一つかも知れない。

平井照敏氏の説によると、日本近代の俳句の歴史は詩を重んずる因子（正岡子規――河東碧梧桐――水原秋桜子――中村草田男――金子兜太――高柳重信ら）と俳を重んずる因子（高浜虚子――石田波郷――飯田龍太――森澄雄など）の相克にあるというが、これは俳句の世界に限ったことではなく、連句の世界にも顕著にあらわれている。外厠や呆けをあわれと見、しおりと見るのが連句界の俳の因子であることは間違いあるまい。

解題●滅多に自賛されない明雅先生が「忘れられぬ作品」の一つとした「風の二月」。詩魂溢れるリズミカルな附合は実に魅力的だ。今年は明雅先生十三回忌を迎える。私たちはこの間、この境地を半歩でも前に進めるための努力を充分にして来たか。未来は、そのことを真摯に見据える先にしかない。（斎）

第一九回えひめ俳口全国連句大会
松山市教育長賞受賞作品
歌仙「散る花や」　鈴木了斎　捌

散る花や雲はみ空に止まりつつ　了斎
　長ながと行く遠足の列　冬乃
春暖炉欲しきときあり山荘に　未悠
　読みかけの本棚に積上げ　遊民
笑ひだしさうな埴輪に月が射し　転石
　鱸（すずき）膾の冷ゆる角皿　ふみ
ウ
菊供養思はぬ人とすれ違ひ　民
　髪の香りにあのときのこと　乃
文の束持てば脆くも輪ゴム切れ　み
　暗渠の水のゆるやかな音　仝
草笛を吹いて少年不登校　乃
　青大將と友達になる　悠
線量計肌身離さず持ち歩き　仝
　一本松に月の寒ざむ　民
A地点枯野へホシに導かれ　石
　かすかに響くピアノ調律　み
歌姫の浴びる金銀紙吹雪　民
　小路小路に号外を投げ　乃
ナオ
短夜の秒針速き腕時計　み
　潜水艦の浮上せぬ夏　石
思ひ出す麦藁帽の忘れもの　仝
　柩に入れる本と真珠と　悠
孫呼んで蒟蒻問答伝授する　乃
　振込め詐欺をおちよくるが趣味　民
うろたへて指先を突く針仕事　石
守り袋にかけるまじなひ　斎
近松忌さああのやうに果てませう　乃
　雪女郎抱けばただ残る水　み
回廊をゆく禅僧の列に月　悠
　胴張り柱にすだくこほろぎ　石
ナウ
濁酒白きに信濃秋深し　乃
　方言俗語俳諧に詠む　み
福耳に汝が福運を感謝せよ　悠
　向う三軒配る草餅　乃
花朧蹴りたき石の見つからず　み
　琴弾鳥の遊ぶをちこち　民

連衆　百武冬乃　棚町未悠　内田遊民
　林　転石　中村ふみ
平成二十六年四月一日　首尾
於　神代植物公園会議室

花咲く場の持つ力
松山市教育長賞受賞に寄せて――鈴木了斎

第十九回えひめ俳口全国連句大会入選作品集より転載

松山市教育長賞に選んでいただいた「散る花や」の巻は、緑華亭宗匠坂本孝子さんが毎年神代植物公園で開催される、お花見連句会での作品だ。

花の句を発句にすることが恒例。つまり初折の花を第一句に「引き揚げる」わけだから、普及している「歌仙標準季題配置表」のような展開にはできない。独自の展開で歌仙一巻の序破急をどのように実現し、挙句に着地させるか、その都度の工夫が必須になる。

これは決して「変則的」なことでは（次頁へ続く）

ない。むしろこれこそが連句本来の姿だ。連句の命は臨機応変の即興的工夫にある。私自身、面倒になるとついつい「配置表」通りの展開で捌いてしまうことも多く、今回「俳口賞」をいただいた二巻もそれに近いことを反省している。予定調和的な「配置表」通りに詠み進んだ一巻というのは、連句としては初心者練習用の「習作」という位置づけに近く、本格的な作品としては物足りないと思う。

花を発句にするこのお花見連句会では「配置表」通りの展開はできないから、問答無用で本来の即興的連句をせざるをえない。しかも、不易流行の何よりの象徴である花の景に囲まれた中で、連衆と捌の「連句魂」が賦活され、即興的展開に不可欠な緊張感、高揚感が持続する効果もあるように思われる。半ば以上は、こうした「場の力」がもたらしてくれた受賞だと思う。何よりこのお花見連句会と、そこに毎年咲く花に感謝する次第です。

事務局だより

●第百三十三回例会（亀戸天神社藤祭興行）が開催されました

四月二十二日（水曜日）、亀戸天神社にて藤祭俳諧興行が開催されました。正午より神楽殿にて公開の正式俳諧を興行、引き続き社務所内の会場にて、八卓に分かれて二十韻の実作を行いました。当日の正式俳諧二十韻一巻は今号のｐ4、実作会二十韻八巻はｐ6～ｐ8に掲載しています。

●第二十五回猫蓑同人会総会が開催されました

六月二十一日（日曜日）、新宿ワシントンホテル新館にて、第二十五回猫蓑同人会総会が開催されました。十一時からの議事の後、八卓に分かれて歌仙を興行しました。当日巻かれた歌仙八巻のうち四巻は今号のｐ2～3に掲載されています。残り四巻は次号（第百一号）に掲載予定です。

●第百三十四回例会（平成二十七年度猫蓑会総会）が開催されました

七月十五日（水曜日）江東区芭蕉記念館にて、猫蓑会総会が開催されました。詳細は次号。

●今後の予定

・芭蕉忌正式俳諧稽古　九月十六日（水曜日）
　於　江東区芭蕉記念館

・第百三十五回例会　芭蕉忌正式俳諧興行・明雅忌（十三回忌）脇起源心実作
　十月二十一日（水曜日）受付十時半より
　於　江東区芭蕉記念館

・第百三十六回例会　平成二十八年初懐紙
　一月十六日（土曜日）受付十一時より
　於　原宿南国酒家

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・橘　文子様　平成二十七年四月　六千円
・深川連句会様　平成二十七年五月　十万円
・名本敦子様　平成二十七年五月　五千円
・匿名　平成二十七年六月　五千円

基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金　普通預金　３３７６０４５

●会員の出版

・四宮連句会作品集第十二巻『魔法館』
　非売品　問い合わせは式田恭子まで

●受賞

・第十九回えひめ俳口全国連句大会
　松山市教育長賞　歌仙「散る花や」鈴木了斎　捌
　俳口賞　歌仙「十二分の一」　仝
　俳口賞　歌仙「空蝉の」　仝
　「散る花や」の巻は今号のｐ11に収録しています。

●訃報

・会員の伊藤則子様がご逝去されました。つつしんでご冥福をお祈りいたします。

●バックナンバー

・「猫蓑作品集」バックナンバーご希望の方は鈴木千惠子まで。
・「猫蓑通信」「季刊連句」バックナンバーは、創刊号以下すべて猫蓑会オフィシャルサイト http://www.neko-mino.org にて閲覧、ダウンロードできます。

季刊　『猫蓑通信』第百号
平成二十七年七月十五日発行
猫蓑会刊
発行人　青木秀樹
〒182・0003
東京都調布市若葉町2・21・16
編集人　鈴木了斎
印刷所　印刷クリエート株式会社